



三百六十  
五円

川崎ゆきお

「一日百円ほどと思うが、十日で千円。月に三千円。年では三万六千五百円になる。これはまとまった金だ。一寸したものが買える」

「まあ、そうなんです」

「今ここで三万円を出して買い物をしようとしても、簡単に買えるものではない。それを買うと月末、食べるものを買うお金がなくなるかもしれん」

「要するに百円貯金の話ですか」

「貯金などしなくてもいいが、少し安い物にすればいいんだ。または百円だからと言って、簡単に買わないことだな。毎日三百円する物を二百円の物にする。すると、月末に三千円ほど残る。これを残していけば済む話だよ」

「それで、貯まったお金はどうするのですか」

「それで、まとまった物を買う。半年に一度なら一万五千円程度の物を買える。年に一度なら三万六千五百円の品物を買える」

「何を買うのですか」

「何でもいい。旅行にでも行けるし、一番安いパソコンも買えるし、タブレットなら簡単に買える」

「そのお金は何処にストックしているのですか」

「財布の中にだ。私はその月の生活費だけ銀行から下ろして財布の中に入れてる。絶対に必要な分だけね。だから、毎月決まった金額しか使わない。だから月末、財布の中に残る。これが楽しみなのだよ」

「残るのがですか」

「貯まってくると、好きなものを買える。余計なものをね。だから、貯めるのが楽しいのじゃなく、つまらん物を買うのが楽しいんだよ。これは使っていい金だ。生活費の中から捻出したものだからね」

「しかし、百円ぐらいでは……」

「何かね」

「月に三千円でしょ」

「そうだ。これだけでも大きいぞ。余計なものを買えるぞ」

「月に三千円程度なら、稼げば問題ない金額ですよ」

「給料は同じだろ。商売人でもない限り、稼ぎは急には増えんぞ」

「じゃ、大きな物を買わなければ、一日百円のことなど考えないで、平気で缶コーヒーの二本や三本は買えますよ」

「缶コーヒーが必要かな」

「必要ですよ。飲まないで頭がしゃきっとしませんから、仕事の効率が悪くなります」

「だから、それは生活費のようなものだから、二本でも三本でも買えばよろしい」

「コーヒーはいいんですか」

「いいんだ。いけないのは、余計なものだ」

「それも欲しくなりますよ」

「百円程度と思い、余計な物を買わないことだね」

「つい買ってしまふことがありますよ。あれば便利かなって思い、買います。あとで使わなくなり、燃えないゴミになります」

「そういうのを買うと、月末小遣いが少なくなっているだろ」

「はい確かに。しかし足りなくなるほど無茶なものは買いませんよ」

「若い間は、あとで取り戻せるチャンスがあるので、それでいいのかもしれないねえ。けち臭いことを考えていると覇気もなくなる」

「覇気ですか」

「氣勢だよ」

「そうです。細かいことを気にしていると、気合いがどんどん減ります。だから、百円程度、いいじゃないですか。多少無駄に使っても」

「まあ、そうなんだがね。一日百円の節約が、結構効果があると言いたかったんだよ。それだけのことだ」

「はい、有り難うございます。よきご指導」

「私はそれで三万六千五百円で家電を買って、失敗した。今は使っていない。三百六十五日我慢したのは何だったのか……と今は悔やんでいる」

「それを聞いて、ほっとしました」

了